

増える草創期投資

新興企業に資金を供給するベンチャーキャピタル(VC)が、創業初期段階のベンチャー企業に投資する例が増えてきた。こうした企業は急成長の可能性を秘める反面、経営リスクも高いため、資金調達に苦しむケースが多い。だが、政府系や独立系のVCが、資金を出すことによって、有望な技術や事業モデルを持つ起業家が育てられていく。

(藤戸 康正)

政府系VCの大阪中小企業投資育成(大阪市)は1963年設立という歴史があり、100社以上に投資してきた。投資先は優良企業が中心で、配当金を主な収入とする堅実路線を歩んできたが、最近はリスクの高い創業初期の投資にも積極的だ。

2000年9月に中小企業組合事業団と共同設立したファンドは、対象を創業7年以内に絞り、投資先23

社のうち約半数は、投資した時点では赤字だった。森下進取締役は「新興企業向けの株式市場の整備で、上場による投資回収がしやすくなったこともあり、最も資金が必要とされる創業初期段階での投資を強化した」と話す。

投資後の経営指導や助言にも力を入れており、熊本大の大学発ベンチャー、トランスジェニックなど3社が、東証マザーズなどへの上場を果たしている。

1月に3000万円の投資を受けた創業3年半の技術者派遣会社、ジェイ・エス・エル(京都市)は20

05年末の上場を目指している。斎藤公明社長(34)は「上場に欠かせない財務・事務部門の強化などは知識としては理解していたが、助言によって具体的な体制づくりに入ることができた」と言う。

オージーアイベンチャーキャピタル(大阪市)は、中小企業の経営者ら10人が99年12月に設立した独立系VCで、これまで3社を上場させた。投資先の27社の大半は創業して間もなく、新規事業で第二の創業を目指す中小企業への投資にも熱心だ。宮里重雄社長(51)

は「経営者の視点で、起業

家のアイデアをどのように大きなビジネスに育てるか」といふ助言に重きを置いて「いる」と語る。

投資先の一つである自動車修理マニュアルのパソコンソフトを手がける会社は、宮里社長の助言で、グループ型コンピューターを開発した大手2社と提携した。このグループを藉けて修理工程を動画で見ながら、工場内を自由に移動して作業できる画期的なソフトを開発し、飛躍のチャンスをつかんだ。

ベンチャーキャピタル

株式市場整い 積極的に

「経営指導や助言も」